

No.477

オーソコーツァイト

たいりく さばく おく
 -大陸の砂漠からの贈りもの-

富山県西部の南砺市福光地域にある刀利ダムを訪れると、山の斜面に赤い崖が見えます(図1)。この崖は「赤壁」とよばれ、約2500万年前の「刀利礫岩層」からなります。

刀利礫岩層は日本海ができる前、富山が大陸の一部だったころ、扇状地や河川などでできた地層です。この地層の中に丸く、表面がややざらざらした礫があります(図2)。これはほとんどが石英の砂粒からなるオーソコーツァイトという岩石で、割ると石英の粒がキラキラと輝きます(図3)。

オーソコーツァイトは大陸の砂漠などでできたと考えられています。砂漠は昼と夜の気温差が激しく、砂粒にとっても過酷な環境です。岩石が風化してできた砂粒は多くの場合、石英の他、長石や雲母などの鉱物からなりますが、砂漠の厳しい環境下で、長石や雲母などの鉱物は分解されてしまい、最後に石英だけが残ります。その砂粒が集まって地層となり、地下でかたまってきた岩石がオーソコーツァイトです。刀利礫岩層のオーソコーツァイト礫は、大陸にあったオーソコーツァイトの地層が削られ、礫となり川を流れ、約2500万年前に堆積して地層にとりこまれたものです。

オーソコーツァイトを薄くして顕微鏡で観察すると、ほとんど丸い石英の粒からなることがわかります(図4)。砂漠の風で砂粒が運ばれるときに丸く磨かれたと考えられます。福光地域ではオーソコーツァイトの礫を削って盃の工芸品を作っています(図5)。(藤田将人)



図1 オーソコーツァイト礫を含む赤壁



図2 刀利礫岩層
(矢印はオーソコーツァイト礫)

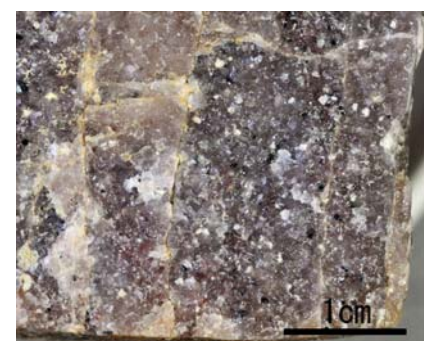


図3 オーソコーツァイト礫の断面



図5 オーソコーツァイトの礫から作った盃

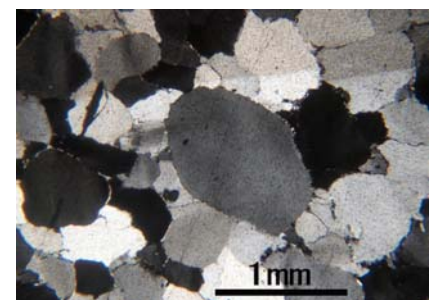


図4 顕微鏡写真